

解放への一歩

～人権尊重のまちづくりをめざして～

第43集



筑紫野市

起きるな

目をさますな

寝ている

コソコソ悪口 陰口 聞こえても
つばを吐きかけられても がまん がまん
だまって寝たふりしている

寝ている子に きつと差別はふりかからぬ
寝ている子を 起こしてまでも きつと他人は差別せぬ

寝ているだけでいい 差別はいつか過ぎ去る いつとは知れぬが
ふれるな さわるな 目をさますな
永遠に いつまでも どこでも

周りの大人は 寝た子を起こすな

「いやだ いやだ」 「差別はいやだ」と 泣き出すぞ

「くやしい」 「つらい」と 叫び出すぞ

「なぜ、起こさぬ」 「どうして、差別するのか」と 怒り出すぞ



「差別する方が悪い」「見て見ぬふりする人が悪い」と 真実を言い出すぞ
だから 寝た子を起こすな
真の「平等、平和、愛、正義」を求めて起き上がるぞ
熱を放ち 光を求めて 動き出すぞ

今 寝た子が起きた

起きて見えた 矛盾と真実

起きて聞こえた 差別なき世を求める 希望の声を

起きて考えた 命の尊さと 幸せを

起きて出会って知った 人間の強さと 弱さを

あなたなら どうする？

また寝たふりするの？ 寝かしつけるの？

いや 動き出し 手を取り 共に歩き出す

差別なき社会に向かって 共に語り合う

これが わたしの寝た子を起こすこと

寝た子を正しく目ざめさせること



そつとしておけば、なくなるの？

PTAの会合にて

小学校の保護者の集まりがあった時、ある知人が言っていました。

「小学校では人権学習が盛んに行われているけど、自分思うに、同和問題について学習をするから差別がなくならないのじゃないかな？」

その人が言うには、小学生のほとんどは同和問題について知らないし、友だちを差別する気持ちもない、どうしてわざわざ教える必要があるのだろうか。

周りの保護者は黙って聞いていましたが、私は「それは違う。『同和問題を知ったから、差別すること自体が問題であり、『知ったからこそ、差別をなくしたい』と考えるのが道理ではないか」と思いました。しかし、適当な言葉が見つからず発言できませんでした。

黙っていてもなくならない

私は知人の「同和問題を教えなければ、いずれ

差別はなくなる」という考えにどうしても疑問が残ります。

同和問題のことが教科書に載り学習を始めたのは、1973（昭和48）年からでした。それ以前は、学校では同和問題のことは教えていませんでした。しかしながら、教えていなくても差別は起こっており、命に関わるような事例もたくさんありました。その様な事実があるからこそ、子どもの時から教育する活動が始まり、現在も続いているのです。

2012（平成24）年に出された「筑紫野市同和問題実態調査報告書」では、「同和問題をどのように知りましたか？」の質問に対して、「学校の学習で」と答えた人が^{36.6}%です。また、「家族」や「友人」など第三者から聞いた人を合わせると^{40.5}%となっています。現在ではインターネットなどから情報を得ることも止められない状況にあり、学校で教えなくても同和問題について知る場はたくさんあるのです。第三者からの聞き伝え、インターネットの書き込みなどは、必ずしも合

理的で正しい情報であるとは限りません。もし間違った情報であるならば、差別をなくすどころか、差別を広げることにもつながります。

私たちがやるべきこと

誤った情報の一人歩きを止めるためには、そんな場面で一人ひとりがストッパーの役割を果たさなければなりません。

そのためには、自分自身が正しい知識を身につけ、周囲のおかしい状況に気づく感覚を養う必要があります。そのためには同和問題の学習は欠かせません。

私は、もしまた、そっとしておけば・・・の場面に会ったたら、「一緒に考えようよ。」と、今では言うことができます。そこで、同和問題の学習で学んだことを話し、考えることで、差別をなくす輪を広げていきたいと強く思います。なぜならば、「差別はあつてはならないものだ」と、誰もが考えているからです。

市の取り組み

市は、1995（平成7）年に制定した「筑紫野市人権都市宣言に関する条例」の中で、「真に差別のない筑紫野市」を実現するために努力し、市民の人権意識を高めるため、学校、企業などと連携して啓発活動を行うと宣言しました。差別はゆるさないという風土づくりのための重要な宣言です。

この考え方のもと、地域における市民懇談会や、企業や事業所での同和問題研修など、様々な場面で市民の人権感覚を養うための活動が行われています。



人と人とのつながりで

心の中には・・・

うちの席 どこにもなかった
うち どこ行っても
よそもんやった
学校 行っても
仕事場 行っても
街に 行っても
場違いのところに 居るようで。

同和教育副読本「かがやき」
高校用（福岡県教育委員会発行）

社会の中には・・・

「部落差別はまだありますか？」

「部落差別って昔のことでしょう？」

「教えなければ誰も知らないし、自然となくなるでしょう。」



「今では生活環境もよくなり、どこが同和地区かなんて、わかりませんよ。」

「そもそも気にしすぎでしょう。同和地区の人かどうかなんて、誰も気にしませんよ。」

本当にそうでしょうか？

例えば、次のような人もいます。

同和地区の出身者の中には、人から「どこから来たの？」と聞かれることに、心配や不安を感じる人がいます。また、タクシーや知り合いに車で送ってもらった際に、自宅の近くではなく、わざわざ少し離れた所で降りしてもらった人もいます。

「もし、自分が同和地区出身だとわかったら、どう思われるだろう。」「自分が同和地区出身だと分かって、友だちでいてくれるだろうか。」

これは、当事者の勝手な思い込みでしょうか？

筑紫野市に報告された同和問題に関わる差別事象は、過去5年間で21件でした。この一件一件の背景には、結婚や住宅購入に関して同和地区を避ける差別意識が見えます。このような意識がある限り、当事者にとっては安心して生活できる社会ではありません。

せん。これは、障害者や女性、性的少数者などさまざまな人権課題にも当てはまります。発覚した差別事象は、「氷山の一角」と言われるように、水面下の目に見えない差別意識が当事者を抑圧するのです。

人と人とのつながりを

同和問題に対して、筑紫野市では1997（平成9）年と2011（平成23）年に市民意識調査を行いました。その中で、「同和問題の解決に対しての考え方」の質問に対して、「同和問題の解決に自分も努力したい（前回比-3.6）」「なりゆきにまかせる（+1.9）」「誰かが解決する（+2.0）」など、無関心・無理解な人が増加しつつあることが分かりました。

一方で、部落差別の現実をふまえた上で、「同和地区について尋ねたり公表したりするのは、そろそろ止めませんか」とインターネットに書き込みをした方や差別反対の声を上げてくれた市民の方がおられます。そうした方々の存在が被差別当事者に元氣と勇気を与えています。

私たちは、差別が人と人との関係を切るものであ

ることを知っています。また、差別をしないで人と人がつながる地域（社会）づくりをすることの大切さも知っています。同和問題の解決は国民的課題であり、本当に一人ひとりを大切にする社会づくりの第一歩だと言われます。今、差別が存在している現実をしっかりと直視して、同和問題についてみんなが関心をもち、多くの学びの場を通して、正しく理解することが求められています。



識字学級に参加して・・・

初めての識字学級

私は、学習活動を支援する担当者として、初めて識字学級に参加することになりました。

少し不安な気持ちで参加した初日には、学級生が学習したいテーマを話し合いました。決まったことは、情報を入手したり就労に役立てるためのパソコン教室、健康に役立つための料理教室、文字を覚えたり絵手紙を書いたりする筆ペン教室などでした。私は筆ペン教室の担当になりました。正直言つて、自分が思っていた読み書きだけの勉強をする識字学級とはちがうものでした。

筆ペン教室で取り組んだこと

私たちは、お手本を見ながら文字を短冊に書き、お互いに教え合うという形で勉強をしました。その中で普段の生活について話したり、差別を受けた経験を聞かせてもらったりしました。一年間の最後には学級生のおばあちゃんから、次のような

感想をもらいました。

識字学級は、たった一つの楽しみであり勉強の場です。上手じゃないけど書くことの楽しさ、勉強できることの嬉しさを育ててくれる場所です。

その時、先輩から教えてもらっていた識字学級の意味が分かったような気がしました。

識字学級とは、

○部落差別により、義務教育の場で学ぶことができなかった人たちが、文字を取り戻す場

○文字を学ぶことで、自らの自信につながり、立場や生き方を見つめなおす場

○健康で、生き生きと文化的に生活するための学びの場

○識字学級に関わる人たちが差別の現実気づくことで人権感覚を磨き、自分や社会を見つめなおす場

ということでした。

同時に自分の中で何かが変わっていったことを

感じました。

改めて考えると

識字学級に参加して、同和地区の人たちと一緒に勉強し、お互いを知っていくにつれて、「なぜ、差別をするのか。」と考えるようになりました。今までは、研修会や学習会に参加しても、「なぜ、差別はなくなるのか。」ということについて考えたことはありませんでした。それは、自分にとって部落差別は他人事であると感じていたからです。また、識字学級に参加することになった時も、読み書きを教える立場と考え、上から目線で見ていたのではないかと思うようになりました。それが、私の差別意識だったのかもしれない。

自分のこととして

識字学級で、差別を受けてきた人たちの苦悩やそれを乗り越える取組にふれることで、差別の痛みを考えることができました。また、相手のことをよく知らない、顔も知らないからこそ、人の噂

や人づてに聞いたことをうのみにして、差別が拡散されるのではないかと思うようになりました。

相手の立場に立って、

相手の気持ちに寄り添うことは、とても大切なことです。私自身も自分の生活だけでなく、仕事においても、それまで以上に相手のことを考えることができるようになったと感じています。

今後自分ができることを考え、差別がないのが当たり前の社会をつくっていくことに努力していきたいと思います。



差別しない生き方を

私は数年前、あることで悩んでいました。その時のことをみなさんにお話します。

新居の購入手続きを進めていたら・・・

私は、他県から筑紫野市内へ住宅を購入して家族で移り住もうとしていました。家の購入を検討中に不動産会社の担当者から連絡が入りました。担当者は、

「実は分譲地の近くには、昔、周囲から差別を受けていた地域があります。それでもこの物件を購入されますか？」と言いました。

私は、どうしてそんな話をされるのかと不動産会社への不信感を抱きました。そこで母や友人に相談しましたが、皆一様に他を探した方がいいというばかりです。そこに住めば私たち家族も同和地区の人だと思われる差別を受けるかもしれない、子どもが学校でいじめられるかもしれない、将来、子どもの結婚に影響したらどうしようか・・・と悩みました。その物件をとてども気に入っていただけに、いろいろと考えましたが答えは出ず、市役所

に電話すれば何か教えてくれるのではと思いました。

市役所へ相談してみたら・・・

Q・・・その分譲地の周辺地域の人達は昔、差別を受けていたと聞きました。それに子どもが通う学校も人権力を入れているとか・・・。差別って今も残っているんですか？

A・・・あなたが心配されていることは、同和問題といいます。その問題を解決するために筑紫野市だけではなく、全国的にさまざまな取組を行っています。同和問題に限らず、障がい者・外国人・高齢者などさまざまな人権問題があり、悲しいことですが差別は今も残っています。だからこそ、そんな理不尽なことをなくすために筑紫野市も総力を挙げて取組を進めているのです。また、宅地建物取引において、同和地区であるかどうかを確かめることは、人権侵害につながるとされています。

それに市内の小・中学校では、子どもたちの思いやりの心を育み、感性豊かな人になれるよう、どこも人権学習に力を入れています。ですからいじめなどの問題も見過ごすことなく、子どもたち全員が楽しい学校生活を過

ごせるようにきちんと対応してくれますよ。

私は市役所から聞いた説明に納得することができました。今まで差別することは間違いと分かっていましたが、その間違った考えを自分自身がもっていたことに気づきました。そして、自分たち家族が差別されるとか、子どもが学校でいじめられるとか、そんな心配はしなくていいんだと安心して新居を決めることができました。

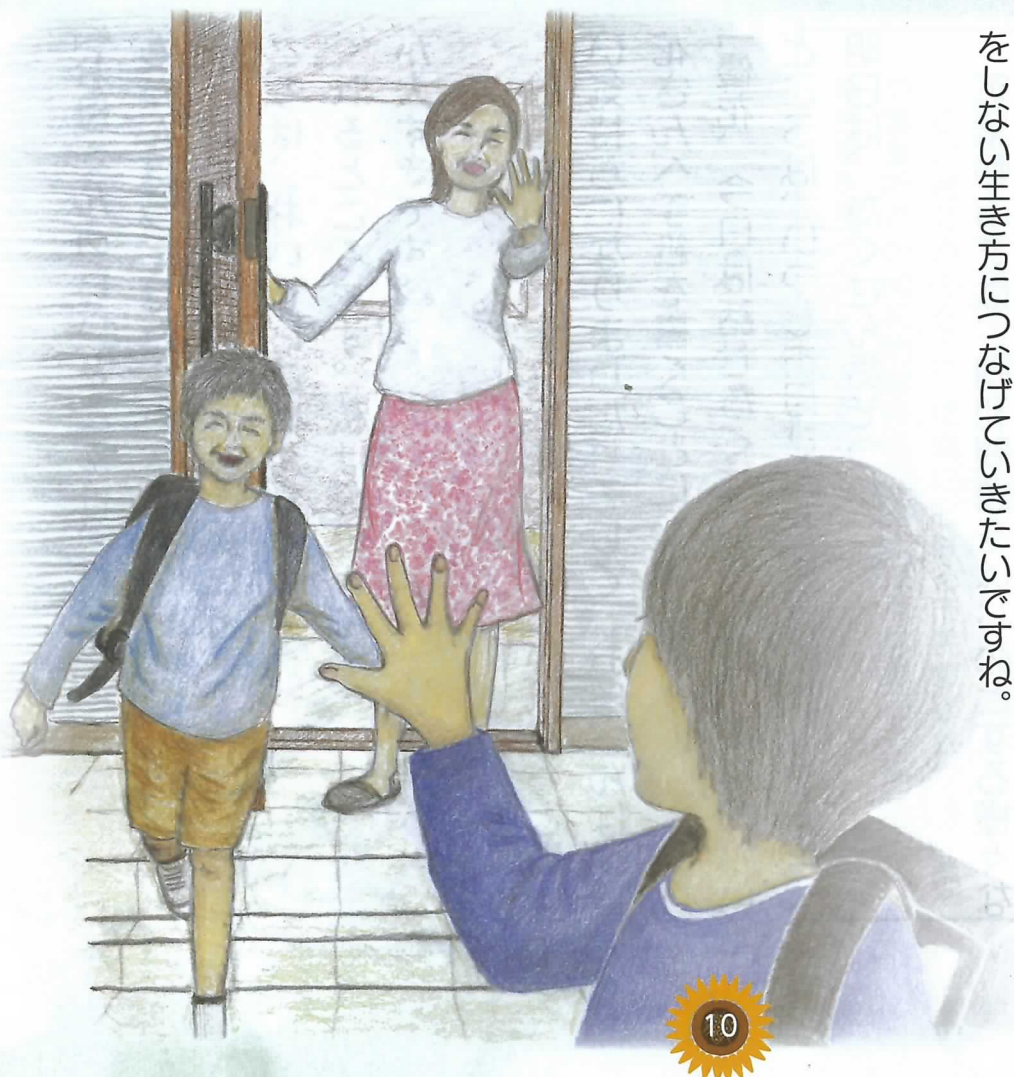
いま実際に住んでみて、私は以前と変わらない生活をしています。子どもも優しい友達に囲まれて、新しい小学校が大好きになって、この学校でよかったと喜んでくれています。だから、今は、ここに越してきて本当に良かったと感じています。私と同じように不安を感じている人がいたら、市役所から聞いたのと同じように話してあげたいと思います。

自ら学ぶ場として・・・

今でも同和地区を問い合わせる人は少なくありません。その地区がどういう地区であるか調べて差別を繰り返すようなことは決して許されないし、なくさなければなり

ません。

無知や無関心は差別を広げ、差別を繰り返すことにつながります。一方、自ら学ぶとする姿は差別をなくすることにつながります。筑紫野市では、講演会や市民講座などをたくさん行っています。学ぶことで一歩ずつ差別をしない生き方につなげていきたいですね。



子どもを大切にする同和教育

お母さんが仕事から帰ってきました。お母さんを心待ちにしていた小学校2年生の優花さんは、お母さんと話がしたいようです。

「ただいま。すぐ、ご飯を作るからね。」

「ねえ、お母さん。今日、道徳の学習で『いいところ見つけ』をしたの。お母さん、私のいいところって何かな？」

「ちょっと待って。早くご飯を作らないといけなし、後にしてくれる？」

「さあ、ご飯ができました。優花さんは話を聞いてもらえるのでしょうか。」

「ねえ、お母さん、さっきの続きだけど…」

「ごめんね。今日はとても疲れたの。明日、ちゃんと話を聞くわね。」

その夜、お母さんは、テーブルの上に優花さんの作文ノートが置いてあるのを見つけました。その作文には、こう書かれてありました。

『お母さんのいいところは、いつもがんばってはたらいてくれるところとです。お母さんのいいところは、おいしいごはんを作ってくれるところとです。私はお母さんが大すきです。』



お母さんは、作文を読んで嬉しい気持ちと切ない気持ちになりました。そして、お母さんは、優花さんへ手紙を書くことにしました。

『優花、今日は話せなくてごめんね。優花のいいところは、いつもお母さんを助けてくれるところ。明日は、たくさん話そうね。』

筑紫野市では、同和教育をはじめとする様々な人権問題を解決するため、行政や学校、地域が連携して「人権尊重のまちづくり」をすすめています。優花さんが話題にしていた『いいところみつ』は、学校での同和教育をさらに深めるために、教育委員会が作成した「人権感覚育成プログラム

（平成25年）」の中にある学習です。特に『自分を大切にする気持ち』を高めることを主とした内容です。

（※人権感覚とは、自他の人権が守られているよさを感じるとともに、人権が侵害されていることを許せないとする感覚のこと）

このプログラムを活用して、小学校から中学校までの9年間で継続的に指導を行うようにしています。

「どうせ、ぼくは・・・」と自信を失っている子どもがいます。「いつも私だけ・・・」と自分をさげすみ、愛されていることを実感できない子どもがいます。目の前にいる子ども一人ひとりに寄り添い、認め、自己実現できるようにしていくことを同和教育は大切にしています。『自分を大切に
する気持ち』は、他者を大切に
する気持ちへと広がり、互いの心のふれあいを可能にし、豊かな関係へと深まっていくものです。

家庭だけでなく、ご近所、地域のみなさんが力を合わせ、子どもたちとのかかわりを通して、子



振り返ってみましょう！

番号	チェック項目
1	☐ 子どもたちは、学校や遊びの話をよくしてくれていますか。
2	☐ 子どもたちは、地域の人へも進んで挨拶していますか。
3	☐ 子どもたちが、がんばっていることや夢を知っていますか。
4	☐ 子どもたちのいいところを、3つ以上言えますか。
5	☐ 地域みんなで、子どもたちを育てていこうとしていますか。

どもたちの『自分を大切に
する気持ち』を育てて
いききたいものです。このこと
で子どもとの絆が深まり、
地域とのつながりが広がって
いくと思います。

子どもたちのことを考えながら、
チェックシートで振り返ってみませんか。

大切なこと、家族で話ができますか？

中学3年生のゆきさんが、学校での人権学習があった日、自宅に帰って母と会話している様子です。

「お母さん、お母さんはお父さんと結婚したとき、部落のこと、知っていたの？」

「好きになったお父さんが、たまたま部落出身だったのよ。好きになった人のことをもっと知りたくて、同和問題を真剣に考えるようになったし、勉強もしたよ。だけど、ずーっと、いつも、同和問題のことばかり考えているわけではないけどね。」

そうか、ゆきは少しほっとした。

「でもね。」母は強い口調になった。「その人の本当の姿を見ないで、部落出身っていう理由で差別したり、偏見をもったりすることは、絶対間違っている。許したらいけないって気持ちがある。もし、お母さんの周りでそんなことがあったら、『まちがっている』『人を傷つけている』ってこと、わかってもらえるように、ちゃんと話をするよ。お父さんやお兄ちゃんも、同じように思うと思う。部落差別だけじゃなくて、障がいのある人への差別や国籍が違う人への差別であっても同じだと思

うよ。」

ゆきは、同じクラスのさちのことを考えた。思いやりがあって明るいさちが、ゆきは大好きだ。もし誰かが、さちの足が不自由で車いすにのっているからといってさちをバカにしたら、ゆきは絶対に許さないでしょう。

「お母さんの言うこと、分かる。」

「そうか。」母はうなずいた。「それにね、もし将来、ゆきが差別されるようなことがあったら、お母さんもお父さんも、絶対、黙ってないよ。ゆきのこと、ちゃんと見てもらうまで話し合っよう。どこの親も一緒よ。」

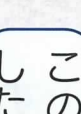
「ありがとう。」

先生
このような話を使って中学校で、人権学習が行われました。その様子を紹介します。



この話を読んで、思ったことはありますか。

この話に出てくるお母さん、素敵だと思います。



どんなところが素敵なのですか。



部落出身ということにとらわれず、今のお父さんを好きになって結婚したこと。



結婚や就職などで差別は続いていると習ったけど、そのような考え方にとらわれていないところですよ。

同和問題のことを真剣に考え、しっかりと勉強したところですよ。

今もなお、結婚や就職などで差別されることがある世の中をどう思いますか。

おかしいと思うし、変えていかないとけないと思います。

そんな世の中を変えるためには、どうしたらいいですか。

結婚差別が今も続いているわけを勉強していくことです。

今日の話のように家族でも、同和問題について話し合ってみるんですよ。

同和問題を正しく知る学習を、学校だけでなくいろいろなところでしていくんですよ。



そうですね。自分から進んで学習したり、家族と本音で話したりすることは大切ですね。ゆきさんのお母さんのように『その人の本当のことを知ることの大切さ』『親として子どもを守る強さ』がとても頼もしいですね。同和問題について学習することで、差別や偏見のない世の中にしていきましょう。

このような学習は、人としてとても大切だとは思いませんか。

誰もが幸せになれる世の中にしていくために、気づき・考え・行動していくことが大切だと言われています。どうぞ、ご家庭でも同和問題について、その他、人としてとても大切なことについて話し合ってみてください。そのことが、差別をなくしみんなが幸せに暮らすことができる社会の実現につながっていくはずですよ。



解放への一步 第43集 アンケート用

(当てはまるものに○をつけて下さい。)

- 1「解放への一步」第43集は・・・①よかった ②まあよかった ③あまりよくなかった ④よくなかった
2心に残った内容は・・・①巻頭詩 ②「そっとしておけば、なくなるの？」 ③「人と人とのつながりで」
④「識字学級に参加して・・・」⑤「差別しない生き方を」⑥「子どもを大切にすると同和教育」
⑦「大切なこと、家族で話ができますか？」

3感想をお聞かせ下さい。

解放への一步 第43集 アンケートのお願い

筑紫野市では、同和教育の解決にむけて、もう一步学びを深めていただきたいと本年度も「解放への一步」第43集を発行いたしました。つきましては、市民の皆様から読まれた感想等をいただき、今後、さらなる充実を図りたいと考えています。趣旨をご理解のうえご協力をよろしくお願いいたします。

○アンケート回答の方法

①FAX:上のアンケート用紙に記入の上、以下の番号にFAX下さい。

・筑紫野市教育政策課人権・同和教育担当:(092)923-9644

②郵送:上のアンケート用紙に記入の上、以下の住所にご送付下さい。

・筑紫野市教育政策課人権・同和教育担当:〒818-8686 筑紫野市二日市西1丁目1番1号

③メール:jinkendouwa@city.chikushino.fukuoka.jp

④筑紫野市ホームページ:以下の手順で「解放への一步」第43集に入ってください感想をお寄せ下さい。

「担当部署から探す」→「教育政策課」→啓発冊子「解放への一步」→2016(平成28)第43集

2016年10月15日発行 解放への一步 第43集

■編集発行

筑紫野市

筑紫野市教育委員会

筑紫野市同和教育研究会

筑紫野市同和教育問題啓発資料編集委員会

■問い合わせ先

筑紫野市教育委員会教育政策課

TEL:(092)923-1111

■印刷

株式会社コーユービジネス

